

## 〔論説〕 日本人とユダヤ人の文化的役割

ベン・アミー・シロニー（倫理研究所客員教授）

### 序文

私は一九三七年に東ポーランドに生まれ、一九四一年のナチス侵入で両親と共にソ連に逃れました。そして終戦後の一九四八年、建国間もないイスラエルへ両親と移住することになり、最初はキブツ（農業共同体）で暮らしました。その後、私はヘブライ大学で歴史と哲学を勉強しました。

私が日本に興味を持ったのは一九六四年で、二十七歳の時でした。当時、私は結婚しており、新聞記者として働きながら、エルサレムにあるヘブライ大学の大学院修士課程で歴史学を学んでいました。私の修士論文のテーマは、「日本への原子爆弾投下と第二次世界大戦の終了」でした。

その頃は、終戦からまだ十九年しか経っておらず、イスラエルでの日本人のイメージは、戦時中ヒトラーに率いられていた日本の同盟国であるナチス・ドイツ同様、残酷な国民であるというものでした。しかしながら、私は、日本について勉強すればする程、日本がナチス・ドイツとは異なり、西洋ではほとんど知られていない興味ある文化を持っている国だということが分かってきました。

そんなある日、私は日本の文部省（現在の文部科学省）による奨学金制度があることを新聞で知り、応募したところ、無事に面接を通して奨学金を受けられることになったのです。このことが、後に私の人生を百八十度変えることになりました。私は新聞記者を辞め、一九六五年の秋、妻と当時まだ赤ん坊だった娘を連れて日本へ向かいました。

私が国際基督教大学で日本語の勉強をしていた二年間は、私にとって素晴らしい時代であり、私と妻は出来るだけ日本文化を吸収するように努めました。当時、日本は高度経済成長期の真っ只中にありました。周りの日本人が一所懸命働いている時、私は日本人の税金のおかげで、二年間楽しく勉強させていただきましたことについて、今、ここにお詫びと感謝を申し上げます。

一九六七年、六日戦争（第三次中東戦争）が終わり、私はイスラエルに帰ってその年の秋からアメリカのプリンストン大学大学院に留学して、博士課程で日本史の研究をしました。プリンストン大学では、マリウス・ジャンセン教授のもとで学び、博士論文のテーマとして「二・二六事件」を選択しました。それは、私とその伝統的で現代的な価値観の交錯に大変魅かれたからです。

一九六九年、再び日本を訪れた私は、この失敗に帰したクーデターに関する文献を集め、当時叛乱に参加し、処刑されていた若い将校達の親族に実際に会ったり、彼らが叛乱を起こした場所に足を運んだりしました。

その中で私は、彼らの素朴な理想主義と、秩父宮殿下との密かな関係に興味をそそられ

ました。一九七三年、私はプリンストン大学出版部から『日本における叛乱』という本を出版しました。また、その二年後には、河野司氏によってこの本が日本語に翻訳されました（『日本の叛乱』河出書房新社）。河野氏は、実際にこの叛乱に参加し、失敗の後、切腹された河野寿大尉のお兄さんに当たられる方です。

私は、この若き将校達の研究を通して、第二次世界大戦中の日本の政治、経済、および文化に興味を持ちました。そして、戦時中の新聞、雑誌、詩、また、日記を読み進めるうちに、西洋の教科書にあるような、過度にステレオタイプ化された当時の日本に対するイメージと、現実の日本は違うのではないかという疑問を感じるようになりました。また、当時の知識人たちが間違っただ信念を抱いていたとしても、日本はアジアを解放するために聖戦を行っていると感じていたことにも心を打たれました。